

2025年1月5日（日）「二人の証人」

ヨハネの黙示録 11:1-6

1 それから、私に杖のような物差しが与えられた。そして、こう告げられた。「立って神の神殿と祭壇とを測り、また礼拝している者たちを数えなさい。2 しかし、神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。測ってはならない。そこは異邦人に与えられたからである。彼らは、四十二か月の間、この聖なる都を踏みにじるであろう。3 私は、私の二人の証人に粗布をまとわせ、千二百六十日の間、預言させよう。」4 この二人の証人とは、大地の主の前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。5 この二人に害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を滅ぼすであろう。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。6 この二人には、預言をしている間、雨が降らないように天を閉じる力がある。また、水を血に変える力があって、望むままに何度でも、あらゆる災いを地にもたらすことができる。

【序論】

ヨハネの黙示録は迫害の中で書かれた書であるため、様々な直喩・隠喩・換喩が用いられています。現代の読者は一読するだけでは何が言われているのか理解できないところが多く、ある意味で「謎解き」のような説き明かしが必要になるでしょう。しかし、隠されていた神の啓示が明らかにされてくるとき、そこで語られている福音を自分のものとして受け入れることが促されてまいります。私自身も机で孤軍奮闘しながら御言葉と向き合っているとき、「ああ、そういう意味だったのか」と理解できると、喜びとともにそれを会衆の皆様にも何としてもお伝えしなくてはならないという思いで満たされます。その意味で、難しい箇所ほどやり甲斐があるとも言えますが、苦労は避けられません。説教者として生かされている恩恵を実感する時です。

【本論】

11～13章は大きなまとまりになっており、「三年半」という象徴的な期間に関わる四つの幻が出てきます。三年半とは、神の民の敵対者による迫害が続く期間で、「四十二ヶ月」「千二百六十日」「一時、二時、半時」とも言い換えられています。いずれも同じ意味です。しかし、これがいつの時代の「迫害期」を意味するのかが解釈の難しいところです。

- ① 神殿と外庭 (11:1-2)
- ② 二人の証人 (11:3-13)
- ③ 女と竜 (12:1-18)
- ④ 二頭の獣 (13:1-18)

本論A. 測り竿で測れ

それから、私に杖のような物差しが与えられた。そして、こう告げられた。「立って神の神殿と祭壇とを測り、また礼拝している者たちを数えなさい。(11:1)

「杖のような物差し」は「竿のような葦」とも訳せますが、葦はヨルダン川の岸辺に群生する竹科の植物で、長さ6メートルほどにもなり、まっすぐで軽いため測量に使われました。主イエスからヨハネにこの「物差し」が手渡されたようですが、ここでは三つのものを測ることが求められています。 ①神の神殿 ②祭壇 ③礼拝している者たち

「測る」とは庇護の下に置くこと、「神殿と祭壇」とはキリストの教会、「礼拝している者たち」とは教会に集う礼拝者を指します。つまり、苦難の時代にあっても尚礼拝に参加し続けている地上の教会に属する人々を主イエスは守っておられるという意味なのです。それに対し、「測るな」と命じられるものもあります。

しかし、神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。測ってはならない。そこは異邦人に与えられたからである。彼らは、四十二か月の間、この聖なる都を踏みにじるであろう。(11:2)

第一世紀のヘロデ神殿には実際に「外の庭」という部分があったようで、そこは「異邦人の庭」と呼ばれ、そこまでは異邦人も入ることが許されていました。形の上ではそのような区別はあるものの、ここでは物理的な神殿ではなく、「礼拝に参加しない人々」「キリストを信じない人々」を表していると思われます。ここでの「異邦人」がキリスト者に敵対的な態度を示す人々のことが言われているのは確かでしょう。「そのままにしておきなさい」とは「神に逆らうままに放っておきなさい」という意味で、彼らが迫害してきても相手にするなということです。「四十二か月の間、この聖なる都を踏みにじる」と言われているように、ある限定された期間、神に敵対する者が勢力を増し加えることが予告されています。

「四十二か月」について、最初に少しふれましたが、これは過去にユダヤ人が経験した異教徒による大迫害の経験が背景にあります。紀元前168年、セレウコス朝シリアのアンティオコス四世エピファネスはエルサレム神殿にゼウス像を建て、それを礼拝するようユダヤ人に強要しただけでなく、ユダヤ教の祭儀を厳禁する政策を打ち立てました。その命令に従わなかった多くのユダヤ人が殺されましたが、ユダ・マカベアを指導者としたユダヤ人の反乱によってユダヤの独立国家が作られたという経緯があります。この時、神殿に像が据えられていた期間が3年半(42か月)であったことから、一過性の迫害を意味することとして「四十二か月」「三年半」「千二百六十日」「一時、二時、半時」という表現が使われるようになったのです。

さて、ここで重要なことは、現代に生きる私たちは「四十二か月」をどのような時代として理解すべきかということです。これには三つの解釈があります。

- ①三年半を1世紀末に起きたローマ帝国による支配と捉える
- ②三年半を新約の全期間(キリストの初臨から再臨まで)と捉え、各時代に獣化したさまざまな国家と理解する
- ③三年半を再臨直前に現れる地球規模の暗黒の帝国と理解する

黙示録の基本的な読み方として、三つの時代を相似的に重ね合わせて見る見方があります。つまり、本書が書かれた時代には、当時起きた事件を「まさに世の終わりの兆候だ」と理解した人々がいて、キリストの再臨を今か今かと待ち望んだのです。しかし、その後二千年以上の月日が流れる中で、繰り返し悪しき支配者が世に現れ、様々な形で人民の大虐殺を行ってきました。それらの出来事の一つひとつが「世の終わりの兆候」に見えたが、再臨は未だ訪れていない。そして、最終的には地球規模の悪の支配が拡大するのでしょうか。富は一握りの超富裕層に一極集中し、その他の人間は奴隷のように監視管理される、そういう社会が実現しつつあることに聖書読者は目を開いている必要があります。

本論B. 二人の証人

しかし、黙示録のメッセージは常にその上を行きます。

私は、私の二人の証人に粗布をまとわせ、千二百六十日の間、預言させよう。」この二人の証人とは、大地の主の前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

(11:3-4)

ここに登場する「二人の証人」とは「キリストの証人」のことですが、具体的に誰を指すかは議論のあるところです。諸説ありますが、内容を統合していくと、大きく二つに分けることができます。

①真理のために殉教する二人の教会指導者

②再臨前の最後の時に命がけで神のことばを守る教会

要するに、個人か集団かという話になりますが、他の箇所「オリーブの木」が神の民を象徴する表現として用いられていたり¹、「燭台」が教会を表しているところから見て²、おそらくこれは「特定の二人の人物」ではなく「終末における教会」を表していると思われます。

¹ 「私に語りかけた御使いが戻って来て、私を揺り起こした。私は眠りから覚まされた人のようであった。彼が「何が見えるか」と尋ねたので、私は答えた。「すべてが金でできている燭台が見えます。その上部には丸い鉢があり、その上に七枚の灯皿があり、その上部にある灯皿には七本の管がありました。その傍らに二本のオリーブの木があり、一本は丸い鉢の右に、もう一本はその左にあります。」(ゼカリヤ 11:1-3)

「私は御使いに、「燭台の右と左にある、二本のオリーブの木は何ですか」と尋ね、重ねて「二本の金の管から金色の油を注いでいる二本のオリーブの木の枝は何ですか」と尋ねた。彼は私に言った。「あなたは、これらが何であるか知らないのか。」私が「主よ、知りません」と答えると、彼は言った。「これらは全地の主のそばに立つ二人の油注がれた人たちである。」(ゼカリヤ 11:11-14)

² 「エフェソにある教会の天使に、こう書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が、こう言われる。』(黙示録 2:1)

「二人」というのは法廷で証言に必要な最少人数なので、キリストの証人としての教会という意味が込められているでしょう。

「粗布をまとう」とは、悲しみや悔い改めを表す行為ですが、教会は闇に覆われた現実を見て悲しみながら、尚も希望のことばを語り続ける。「千二百六十日」とは「四十二か月」の言い換えであり、迫害を受けながらも福音を語るのを決してやめないことを意味します。そして、この「二人の証人」なる教会には、敵と戦うための不思議な力が与えられると言われています。

この二人に害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を滅ぼすであろう。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。この二人には、預言をしている間、雨が降らないように天を閉じる力がある。また、水を血に変える力があって、望むままに何度でも、あらゆる災いを地にもたらすことができる。(11:5-6)

ここで「二人の証人」に与えられている三つの力は、旧約聖書に登場する指導者たちの超越的な力を思い起こさせます。

①口から火が出て、その敵を滅ぼす……エリヤ（Ⅱ列王 1:10, 12）

②雨が降らないように天を閉じる……エリヤ（Ⅰ列王 17:1）

③水を血に変える……モーセ（出 7:14-21）

最終末期にはそれほどの祈りの力が教会に与えられるのかもしれませんが。このことをどう理解すればよいか、私の中でも大変悩みながら御言葉に取り組んでいたのですが、ここでモーセとエリヤが暗示されている点に注目してみました。モーセとエリヤにはいくつかの共通点があります。

- ・ 神の力をもって自然界に影響を与える
- ・ 死に場所が不明または昇天した（申命 34:6、Ⅱ列王 2:11）
- ・ 主イエスの変貌のとき一緒に居合わせている（マルコ 9:4）

マルコの記事において、モーセは律法の代表、エリヤは預言者の代表、すなわち旧約全体を代表する二人として登場しています。そのような観点から今日の箇所を読み解くと、神がその救済史全体で表された力が地上の教会を通して地に現されるということになるでしょう。教会は権力や暴力によって戦うのではなく、祈りによって神の栄光を地にもたらすのです。教会が祈りの力で満たされるとき、そのような神の御業を見ることになるでしょう。私たちと共におられる方は天地の創造主であることを忘れてはならないのです。

【結論】

「オリーブの木」「燭台」とは教会を表すと申し上げました。しかし、教会は群れの先頭に立って御言葉を取り継ぐ働き人を必要としているのも事実です。多くの教会が無牧となっている今、恐れずに福音を述べ伝える働き人が興されることを祈っていかなくてはなりません。そして、群れが力づけられ、一人ひとりが自立した信仰をもって主に祈り、教会が目に見えない神の力で悪に勝利していくのを目にしたいと思います。

【祈り】

各時代の教会に力を与え給う、天の父なる神様。福音に生きようとするとき、それを妨げる力が必ず働きます。しかし、どのような時にも教会は福音を宣べ伝えなくてはなりません。そのための力と、群れの先頭に立って御言葉を取り次ぐ働き人とを、絶えず興し続けてください。今何らかの意味で力を失っている教会がありましたら、聖霊の息吹を吹き込んでください。そして、私たち一人ひとりが同様の力で満たされますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

あらゆる時代にキリストの証人を立て、宣教のことばを語らせ給う、父なる神の愛、万物の創造者、教会の主として、ご自身の群れを信仰に立たせ給う、主イエス・キリストの恵み、

時のしるしを見極めさせ、不思議なる息吹をもて民に力を注ぎ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。